

## 〈研究成果の紹介〉

## アカマルカイガラムシ幼虫の発生消長

農業研究部紀南果樹研究室

## 1. 成果の内容

アカマルカイガラムシはカンキツ類の主要害虫として世界的に知られています。日本では、もともと九州以南で発生していましたが、近年、愛媛県瀬戸内地方、三重県南部でも確認され、国内における発生地域が拡大しているようです(写真)。三重県南部では、防除対策を講じていますが、被害をコントロールできているとはいえません。そこで、三重県南部地域における幼虫発生消長の調査を行い、防除適期を検討しようと考えました。

研究室内の無防除露地カンキツ園地で、数年間、春枝や春葉に寄生している雌成虫をマークして、脱出、定着する1,2齢幼虫数を、約10日間隔で調査しました。

第1世代幼虫の発生は、6月上旬頃から始まって、9月下旬まで続きます。発生のピークは、例年6月下旬から7月上旬です。第2世代幼虫の発生は、8月上旬から始まって、年によっては11月にも発生が確認されました。発生のピークは、例年8月下旬から9月上旬でした(図)。

また、2003年調査において、1雌あたりの幼虫平均産下数は、第1世代で61.4匹、第2世代で89.5匹となり、第2世代で多くなる傾向が確認されました。

これらの結果から、三重県南部において、第1世

代幼虫の密度を下げるための薬剤散布適期は、密度が上昇する7月上中旬と考えられます。第2世代幼虫については、8月下旬と考えられます。本種が当地域で定着した経緯、急増した詳しい原因は明らかではありません。密度抑制のためには、発生地域内の天敵類を含めた詳細な発生動態を調査する必要があるだろうと考えています。

## 2. 技術の適用効果と適用範囲

アカマルカイガラムシが発生しているすべてのカンキツ園地の防除技術として活用できます。関係機関(地域農業改良普及センター、病虫害防除所等)が発表する病虫害発生予察情報を参考にすると、より精度の高い防除が可能になります。

## 3. 普及・利用上の問題点

まず、第1世代幼虫の密度を下げるのが重要です。激発している園地では、1回の防除では成虫の密度を下げるのが困難で、年数回のアカマルカイガラムシ対策の殺虫剤体系防除が必要です。冬期のマシン油乳剤も有効なので、樹勢の維持に努めて、ていねいな散布ができる樹体、園地づくりが必要です。

(鈴木 賢)



写真：アカマルカイガラムシ果実寄生の様子

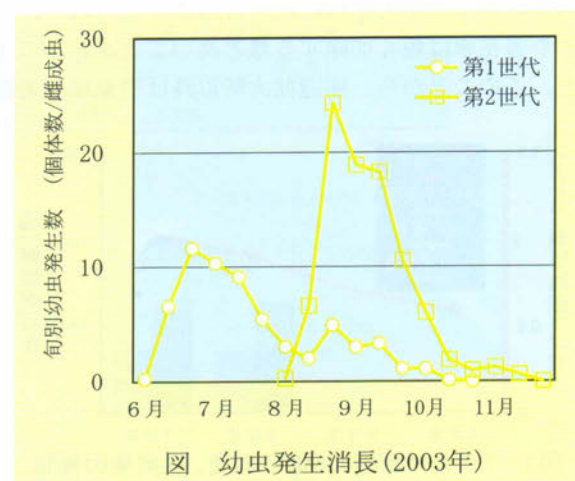


図 幼虫発生消長(2003年)